

港北ニュータウンにおける緑道の魅力

—その基本計画と郊外住宅地における緑地の変遷から考える—

[誘導展開型]

清水希理（経済学部3年）

指導教員：伊藤行雄

本論文は、作られた「まち」の一つである港北ニュータウンを取り上げ、港北ニュータウンにおける特徴的な「緑道」が、それを有する港北ニュータウンという「まち」の魅力となっていることを明らかにするものである。そのために、港北ニュータウンの「緑道」がどのようなものであるか、その基本計画と郊外住宅地における緑地の変遷から考えていく。

第1章は、「緑道」の背景として日本における「緑地」の概念の変遷を整理するものである。日本の「緑地」は、江戸時代以前から誰にも開かれていた遊観の地が明治に入って公園という「営造物」として制度化され、関東大震災と戦時体制を経て、都市の衛生・防災の役割を果たす施設へと変化していった。日本の「緑地」は、変化の過程において欧米の影響を多く受けながらも、広く公に開かれたオープンスペースという欧米の「緑地」の概念とは異なり、衛生・防災施設という独自の概念を形成してきたのである。

第2章は、港北ニュータウンに至るまでの郊外住宅地の変遷をたどり、その中で「緑地」がどのように扱われてきたのか整理するものである。戦前の郊外住宅地は、都市の近代化による職住分離と鉄道の発達を背景に、郊外の豊かな環境に「健康」を求めた住宅地を形成していった。ここにおいて緑地は、「健康」を担う施設として、もともと郊外に存在していた自然を住宅地に取り込んだものであった。戦後、開発が進むにつれて郊外は拡大し、都市内のみならずかつて郊外であった場所においても自然が希少なものとなった。その中で、自然は都市の付加価値として捉えられ、都市に「緑地」が設けられるようになっていったのである。

第3章は、前章までの流れの中で生まれた港北ニュータウンの基本計画で設けられた「緑道」が、他の「緑道」とは異なる独特なものであることを考察している。港北ニュータウンにおける「緑道」は、

都市内の公園・緑地空間をつなぐ歩行者専用道路であるとともに、公園・緑地空間の延長として様々な機能を持つ多目的な空間である。

港北ニュータウンにおける「緑道」は、既成の緑地概念を背景に持ちながら、それとは異なる形で「まち」に取り入れられることによって、他の「まち」には無い新たな空間を生み出した。その意味で港北ニュータウンの「緑道」は、「まち」を魅力づける特徴的な要素として位置づけるという結論に至っている。